研究委員会企画シンポジウム 3

教育の中のジェンダー問題

— 実践教育からの提案 —

Gender issues in education : Three reports on educational practices

Takako YUKAWA, Keiko TAKAHASHI, Atsuko AONO, Makiko KASAI, Tadayuki SAWADA AND Chikako OGURA

司会者 高橋 恵子 (聖心女子大学)
企画者 湯川 隆子 (三重大学)
高橋 恵子 (聖心女子大学)
話題提供者 青野 篤子 (福山大学)
葛西 真記子 (鳴門教育大学)
澤田 忠幸 (愛媛県立医療技術大学)
総括的討論 小倉 千加子 (みずず学園森町こども園)

企画の趣旨

ジェンダー（社会・文化的な性のありよう）にもとづく差別を解消するための努力は、家庭や学校、身近な生活場面、職場、さらには政策・行政などのあらゆる場において、根気よく続けていく必要がある。意図的、無意図的に埋め込まれているジェンダーにもとづく差別は、殊にわが国では看過できない。本シンポジウムでは、ジェンダーによる差別の問題を、教育現場でとりあげ、教育・実践研究にもとづいて、何がどのように問題であるのか、どのように取り組めばよいのかを考える。具体的には三つの実践報告をもとに、教育現場でのジェンダーにかかわる問題の理解を深め、差別を解消する方向を明らかにしたい。

幼児の性別の認識と性別役割の発達にみる差別的ジェンダー化の問題—保育現場での実践研究から—

青野 篤子

小学1年生に将来の夢を聞くと、女の子は花屋さんやタレント、男の子ならスポーツ選手や警察官というように、ステレオタイプな反応が返ってくる。これらが決して「あこがれ」や「夢」に終わらないことを、中高生の職業希望や大学生の専攻選択におけるジェンダー・アンバランスが如実に物語る（青野, 2008）。そこで、性別の認識が生まれ性別役割の習得が始まる幼児期の経験や教育が大きな役割を果たすと考えられる。

1990年代にはいわゆるジェンダー・フリー保育が推奨され、保育者や保護者のジェンダー意識や保育環境における隠れたカリキュラムを是正する等の取り組みが大学研究者や保育関係者により進められた。しかし、2000年代になると、それへの抵抗が強まり（いわゆるジェンダー・フリー・パッシング）、ジェンダー・フリー保育は取り組み半ばで衰退していく。ジェンダー・フリーは今や死語になっているが、ジェンダー・フリー保育はどのように生き延びる可能性があるか、可能性があるとすれば、どのような課題があるかを以下の3点について検討する。

保育における「性＝セクシュアリティ、ジェンダー」の問題

ジェンダー化された社会の中では、子どもの性別の認識や関心はかなり早期に芽生えるし、大人も幼い子どもも性的な存在としてみられる傾向がある。そこから着替えやトイレ使用で男女を分けるという発想が出てくるのであろうが、保育園や幼稚園の年少児でもそれが必要だろうか。実際に保育に携わっている保育者の意見では、「幼児期には男女差がほとんどないので一緒でかまわない」と考える人が約半数、「男女差に気づかせる意味でも幼児期は一緒の方がよい」と考える人が約20%いた。セクシュアリティにおおらかな環境の中でこそ、子どもに芽生える羞恥心や性意識に敏感に気づくことができるのではないだろうか。

もう一つの保育におけるセクシュアリティの問題は、男性保育士をめぐる問題として浮上する。保育は母親育児の代替とみなされ、男性の職域としては未開発の部分である。保護者と保育士を対象にした調査によると、男性保育士は、育児の適性がなく心配りや細心さに欠けるだけでなく、女児に対する保育に限界があり（添い寝や排せつの世話など）、性的ないたずらへの心配の声が聞かれた。男性保育士への面接調査でも、そういった懸念を敏感に感じ取っていることがわかった。

母親の役割と女性保育士の距離がきわめて近いのに対して、男性保育士は父親の代わりではなく、性的存在である「男性」としてみられていることがわかる。ところが興味深いことに、男性保育士の存在が常態化している園では、女性保育士も保護者も、男性保育士の適性や役割への期待が女性保育士に近いものになることが調査により明らかになった。現場は、ジェンダー平等とリスクを天秤にかけているのが実情であろう。ジェンダー・フリーからジェンダー・センシティブへ

子どもに自由に選択させると、性別ステレオタイプに沿った選択をすることが多い。結果的にそれは「不自由」なことではないか。筆者は、保育園の協力を得て、男女の不得意な面に働きかけ、子どもの選択肢を広げる保育プログラム（描画、スポーツ）を試み、その効果を検証した。ポイントと考えたのは、①モデリング（観察学習）の効果をねらう、②ジェンダーにとらわれないモデルを男女大学生が演じる、③消極的な子どもには参加を促し、スキルを教える、④ジェンダー・ステレオタイプと反対の行動を奨励する、ということであった。描画プログラムでは、青とピンクの手形、森の中の花畑、海の中、秋の花と昆虫等を描かせることにより、女兒の寒色の使用率が増加する（男児はもともと太陽を描くなど暖色の使用率が高かった）という結果をもたらした。また、約2か月にわたり男女大学生がサッカーを男女混合の園児集団に教えるという試みを続けた結果、女兒のサッカーに対する好意度が高まった。子どもの自由にまかせる、選択肢を多くするというだけでなく、子どもがそれを実行するための働きかけが必要だと言える。

ジェンダー平等社会に向けて保育園・幼稚園が果たす役割

保育園には、子どものケアだけではなく、子育て支援や教育的機能が求められている。その一つがジェンダー平等についての情報発信とジェンダー平等保育の実践である。ジェンダー（・フリー）ということばは使用に注意するように行政指導がなされたが、やはり男女の不均衡な関係を表すのに必要なことばである。一般の人たちもかなり関心をもち、ジェンダーの社会構成的意義を理解していることが筆者が行った調査で示されている。そのことから、保育園と家庭とが連携してジェンダー・フリーの実践を行うことは可能であると言えるし、保育園がイニシアティブをとるべきではないだろうか。もう一つの課題は男性保育士の参入である。筆者が行った男性保育士への面接調査では、女性の聖域とも言える保育現場で、マイノリティとし

て、ときに男性役割の体現者として期待される戸惑いの感情とともに、自分らしさを発揮した保育をしたいという希望も表明された。男性保育士を増やすことは、ケア＝女性の役割というステレオタイプを打破し、保育の内容を豊かにすることになるのではないだろうか。

文 献

青野篤子（2008）. ジェンダーの観点からみた中学生と高校生の職業態度 心理科学, 29, 18-31.

青野篤子（2012）. ジェンダー・フリー保育 多賀出版

いわゆる性的マイノリティに対する差別的ジェンダー化の問題—教育的援助のあり方について—

葛西 真記子

近年、同性愛、両性愛、性同一性障害など多様なセクシュアリティに対する人々の意識は変化してきている。海外では同性間の婚姻や結婚を当然の権利として認める国が増えてきており、国際精神医学会や WHO でも、同性愛を治療の対象から外し、「異常」「倒錯」とみなさなくなってきた。日本では、性同一性障害に関して、2004年に「性同一性障害者の性別取り扱い特例法」が施行され、性同一性障害者の戸籍の変更が可能になった。また、家庭科教科書（2003年度）に家族形態の一つとして同性のカップルが取り上げられるようになった。しかし、性に関して柔軟な社会であると言い切れるほど、偏見、差別、誤解がなくなっているわけではない。

学校現場におけるセクシュアル・マイノリティ

日本の学校現場においては、依然として異性愛を中心とした教育が根強くなされている。そのため、多様なセクシュアリティの当事者が安心して相談できる場や人も少なく、自身の同性愛志向や性別違和感を認識し始める思春期において、「誰にも言えない」という思いから孤独感や孤立感、自己否定感を持つようになることが多い。また、同性愛者や両性愛の男性のうち、それを隠そうとすることからくるストレスで精神的健康を害し、自殺を考えたことがある人が6割あまりいることが報告されている（河口, 2000；小宮, 2002）。さらに、彼らは抑うつ傾向、強い不安傾向、アルコール依存や薬物依存などの精神健康上の問題を抱えていることも報告されている（セクシュアル・マイノリティ教職員ネットワーク, 2003）。

異性愛主義と同性愛嫌悪

一般に人々が同性愛者に対して嫌悪感を抱くことを同性愛嫌悪（Homophobia）と言う。同性愛を嫌悪する

背景には、異性愛が「正常」「当たり前」「普通」であるとする異性愛主義が存在しているため、異性愛以外のセクシュアリティを持つ人々は少数派であり、「異常」「変態」というレッテルを貼られてしまう。異性愛主義は人々の生活の中に深く浸透しており、学校現場でも異性愛が当然であるという認識が暗黙のうちにされている。そして、セクシュアル・マイノリティの当事者も異性愛主義の考え方にさらされてきた結果、知らず知らずのうちに同性愛嫌悪を内面化し、自分自身に対する嫌悪感をもち、自らを否定し肯定的な自己を形成することが難しくなる。小宮 (2002) は、セクシュアル・マイノリティが抱える精神的困難には、「自己受容の困難」「自己開示の困難」「自己イメージの困難」「自己回避の困難」があるとし、それが、否定的な自己像につながっていくことを指摘している。

セクシュアル・マイノリティ当事者への対応

当事者である児童生徒が、自分自身のセクシュアリティを自覚し始めた時に、自分自身に対する嫌悪感や違和感を持つことなくそれを受け入れ、精神的に健康な状態で成長していくためには、彼らの周りの環境の価値観や考え方がセクシュアル・マイノリティに対して肯定的でなければならない。そのためには、彼らにかかわる教員の意識変容が鍵となり、意識変容ができれば、異性愛主義・同性愛嫌悪的である学校現場の価値観・考え方の変容も可能となる。葛西・岡橋 (2011) は、このような意識変容を目指した心理教育プログラムを開発しその効果を検証した。このプログラムは、自身の異性愛主義やセクシュアル・マイノリティへの偏見に気づくこと、正確な知識、かわり・支援に関するスキルに焦点をあてた5回の実践型のプログラムであった。その結果、参加者のセクシュアル・マイノリティへ支援を行うことへの自己効力感 (葛西, 2011) が上昇した。このプログラムはカウンセリングなどの心理的支援を行う人々を対象にしたものであったため、今後は一般の教員を対象にプログラムを行い、学校現場がセクシュアル・マイノリティに対して肯定的な環境になるような支援が必要であると思われる。

文 献

- 葛西真記子 (2011). 同性愛・両性愛肯定的カウンセリング自己効力感尺度日本語版 (LGB-CSIJ) 作成の試み 鳴門教育大学研究紀要, 26, 76-87.
- 葛西真記子・岡橋陽子 (2011). LGB sensitive カウンセラー養成プログラムの実践—臨床心理士養成指定大学院での試み— 心理臨床学研究, 29, 257-268.

河口和也 (2000). 同性愛とピア・カウンセリング—アーカーの電話相談の経験から— 臨床心理学研究, 37, 70-73.

小宮明彦 (2002). 同性愛・多様なセクシュアリティ—人権と共生を学ぶ授業— “人間と性” 教育研究所 (編) 子どもの未来社

セクシュアル・マイノリティ教職員ネットワーク (2003). セクシュアル・マイノリティ—同性愛, 性同一性障害, インターセックスの当事者が語る人間の多様な性— 明石書店

キャリア教育におけるジェンダー問題 —看護職におけるジェンダー問題と看護職志望の 学生への準備教育から—

澤田 忠幸

今日、多くの大学においてキャリア教育の取り組みが行われている。この背景には、雇用情勢の不安や学校から社会・職業への移行が円滑に行われていない現状がある。一方、看護職者の養成教育は、職業教育 (一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育) を中心に構成されてきた経緯があり、キャリア教育は、主として卒後教育において、狭義の職能開発として行われてきた。本報告では、このような状況を踏まえつつ、看護師を例として、職業教育やキャリア教育におけるジェンダー・およびセクシュアリティの問題について、以下の3点について検討する。

看護職におけるジェンダー・セクシュアリティ—男性 看護師の問題を中心に—

日本看護協会によると、2010年度男性看護師 (含. 保健師, 准看護師) の総数は77,525名である。看護師全体に占める割合は、保健師助産師看護師法の改正により看護師の名称が用いられるようになった2002年の4.2%からは増加しているが、5.6%にすぎない。

法的位置づけと教育制度における変遷 看護婦規則 (1915) および保健婦助産婦看護婦法 (1948) により、看護婦は女子であることとされ、「男子である看護人については、この法律中、看護婦又は准看護婦の規定に準用する」 (保助看法, 1948) と規定されていた。その後、1954年の保健婦助産婦看護婦法施行規則で、男子の国家試験科目から産婦人科学が除外されたことに伴い、産婦人科・母性看護学実習が削除され、代わりに精神科の実習が加算されてきた。この状況は1968年に看護士に名称変更された後も変わらず、1989年の保健婦助産婦看護婦法施行規則の改正により、漸く

男女で教育内容が平等となった。名称が男女共通の看護師に統一されたのは2002年からである。その一方で、看護職のうち、男性保健師が認められたのは1993年以降であり、助産師は現在も女子のみとなっている。

男性看護師の意識と周りからの期待 男性看護師をめぐる現状や意義については、制度の変遷とともに、これまでも度々議論されてきている (e.g., 『看護学雑誌』『看護教育』医学書院)。その中では、男性看護師が抱える困難として、①組織の中で少数派であることに伴う困難、②女性職社会に入ることに伴う困難、③身体接触を伴う業務であることに伴う困難、の3点 (船橋, 2001) が繰り返し指摘されてきた。

たとえば、女性患者からの看護を拒否された体験が職務性差感を強め、その結果、男性看護師の職務満足に影響することが明らかにされている。また、女性看護師が男性看護師に対して感じる困惑・負担感や期待する役割、あるいは男性看護師の自発的職場内行動等に、ジェンダー意識やセクシュアリティの問題が関わっていることが指摘されている。

看護職者のキャリア形成—専門性の向上とジェンダー—

今日、医療技術の高度化や入院期間の短縮化、それに伴う患者ニーズの変化などにより、看護師に求められる業務内容や役割は、従来以上に高度化かつ多様化している。その一方で、日々の業務においては、感情労働としての側面が強く求められている。このような状況の下、看護という業 (すなわち“療養上の世話又は診療の補助”) に伝統的な女性性を強調することは、看護職の専門化を阻害する可能性も指摘されている。

これまでに、専門職者としての看護師のあり方として、二つの方向性が示唆されている (朝倉, 2011)。第一は、看護職の職務内容を女性性や男性性から切り離し、専門的技術や知識に焦点化することでジェンダーを不可視化する、あるいは男女差を個人差に置き換える方向性である。第二は、女性的にジェンダー化された職業役割を前提としつつ、少数派である男性看護職者が自らの男性性を可視化することで、必要とされる領域を具体的に示していく方向性・スタンスである。これらは看護師自身のキャリア形成のみならず、学生の教育に指導者として関わる際の看護観、ひいては学生の看護観の形成にも影響する課題である。

ジェンダーに囚われない職業教育・キャリア教育への取り組み—協同学習の活用—

近年、看護教育の領域においても協同学習 (co-operative learning) に関心が寄せられている (安永, 2012)。

協同学習では、メンバー相互の異質性・多様性を重視し、学生は協力して学び合うことで学習内容の理解・習得を目指すとともに、協同の価値を学ぶことが意図されている。代表的な技法の一つにジグソー学習がある。現在、筆者の所属する大学では、協同学習を基盤としてキャリア教育の視点を含めた初年次教育の取り組みを始めた段階である (<https://most-keep.jp/portal> 参照)。しかし、他大学では既に看護の専門科目・実習科目にジグソー学習を取り入れた実践例も報告されている。協同学習はチーム医療のみならず、ジェンダーに囚われない教育実践の試みとして、今後の展開が期待される。

文 献

- 朝倉京子 (2011). 男性看護者の“サバイバル論” 看護教育, 52, 285-289.
船橋恵子 (2001). 看護とジェンダー 看護教育, 42, 14-18.
安永 悟 (2012). 活動性を高める授業作り—協同学習のすすめ— 医学書院

話題提供者のそれぞれについての小倉の質問とコメント、参加者の教育実践への質問への応答を中心にして、次のような議論がなされた。

セックス, ジェンダー, セクシュアリティ 話題提供された教育実践では三つの性のすべてが関わっていること、特に、心理学では問題にされなかったセクシュアリティが複雑に関わっていることが指摘された。小倉はジェンダーが知識であるのに対してセクシュアリティは感情であり、出現時期は三つの中でもっとも早いとした。話題提供者が問題にした、幼児の性別集団化、男性保育者や男性看護職者についての社会や本人の躊躇、セクシュアル・マイノリティ等々の問題では、この視点が重要であることが論じられた。

性別二元性 葛西の報告によればいわゆるセクシュアル・マイノリティの大学生は5~20%であるという。少数派であると考えるべきではないことがわかる。性別二元性を前提とすることの問題が提起された。性の多様性を教育現場でどう扱うかが問われている。

本質主義 vs. 社会構築主義 性別二元性の否定は、本質主義の否定にも問題を投げかけていることになる。性・性差についても生命科学が膨大な証拠を出している現在、遺伝子と環境の相互作用 (GxE) が指摘されている。ジェンダー問題を考える視点も検討すべき時期がきているという問題が提起された。